

新語はどのような特徴を持つか ～造語法の観点から～ S. S<国際②>

1. はじめに

SNS上やカジュアルな会話などで多く使われる新語は「新語・流行語大賞」や「今年の新語」などで大きく取り上げられる。そうした新語は、何処か聞き馴染みのある言葉だったり、反対に全く聞いたことのない言葉だったり、特徴が様々である。そこで、本研究では新語がどのような特徴を持つのかを、主に造語法の観点から調査し、考察していく。

2. 造語法について

2.1 本研究における造語法

米川（1982）は、既存の語を用いた新語の造語法は「借用法」、「合成法」、「もじり」、「類推法」、「派生法」、「省略法」の6つに分類されるとしている。それに加え、有元・黒崎ら（2017）によると、新語形成の言語行動として「セリフ化」もあるという。そこで本研究では新語を造語法としての特徴が現れやすい「借用法」、「合成法」、「もじり」、「省略法」、「セリフ化」の5つに分類することとする。なお、本研究で「類推法」を除いたのは間違えて読んだ既存の語を新語とするという造語の仕組みが今回の調査方法に適していないからであり、「派生法」を除いたのは「派生法」で造られた新語はその他の造語法の特徴を持っていることが多く、ひとまとめに「派生法」として分類することが難しいからである。

2.2 それぞれの造語法

（1）「借用法」は既存の語・外国語からそのままの言葉を新語とする造語法である

例 ワクチン カステラ

（2）「合成法」は既存の別の語2つ以上を組み合わせる造語法である

例 タピる 親ガチャ

（3）「もじり」は語感はそのままに、既存の語の1部を変える/日本語の内容を外国語風にする造語法である

例 花より男子（花より団子）

（4）「省略法」は既存の語の1部を省略する造語法である

例 タイパ（タイムパフォーマンス）

（5）「セリフ化」は誰かに語りかけるような、話し言葉を用いた造語法である

例 それな 知らんけど

3. 実験内容

3.1 調査方法

茨城県立竹園高等学校の1,2年生を対象に「現在名前が存在していない事物や概念に名前をつけてもらう」という内容でアンケート調査を行い、得られた結果を造語法に分類する。なお、分類が難しい造語については本研究では集計から除いている。

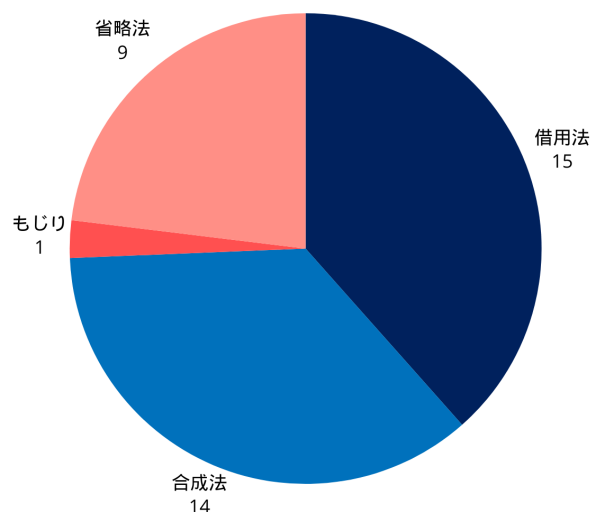
質問項目は、

- ①「楽しいと思うときは時間の流れが早く、つまらないと思うときは時間の流れが遅く感じる」と名前をつけてください。
- ②「マークシートで同じ番号が連続したときの不安な気持ち」に名前をつけてください。
- ③「体育館の天井に挟まっているボール」に名前をつけてください。
- ④「特に朝は時間の進みが早いこと」に名前をつけてください。
- ⑤「前から歩いてくる人にぶつかりそうになって左右に避けたらまたぶつかりそうになること」に名前をつけてください。

の5つである。

3.2 事前調査

アンケート調査を行うにあたり、事前に三省堂の「今年の新語2019」～「今年の新語2023」で選定された新語計39個を分類し広く新語として使用されている語の特徴をまとめた。



結果として、「借用法」と「合成法」の数はほとんど等しく、もじりは0に近く、「セリフ化」による新語は選定されていなかった。

3.3 仮説

現在、グローバル化が進んでいるため外国語をそのまま用いる「借用法」による造語が一番多く、それに次いで、聞き馴染みのある言葉が多く使われやすいと考えるため「合成法」が多いと考える。

4. 結果

	①	②	③	④	⑤	計
借用	8	8	8	12	11	47
合成	18	14	9	6	11	58
もじり	1	1	3	0	1	6
省略	0	1	1	2	1	5
セリフ	2	4	3	3	4	16
計	29	28	24	23	28	132

質問①では半分以上が「合成法」による造語で質問②も同様であった。質問③では「借用法」、「合成法」による造語の数がほとんど同じくらいで「もじり」による造語が少し多く見られた。質問④では「借用法」が多く、「合成法」による造語はその半分だった。また、「もじり」による造語は見られなかった。質問⑤では「借用法」と「合成法」の回答数が同じとなった。また質問全体を見ると「合成法」が一番多く「借用法」が次いで多

かった。この2つの造語法と大きく差がついて「セリフ化」「もじり」「省略法」の順となった。

5. 考察

得られた結果は仮説とほとんど同じ結果となったが、質問の内容によっては「借用法」と「合成法」でどちらが多いかが異なっていた。これは、質問文が長いほどその文の中から単語を抜き出し、その言葉を組み合わせて造りやすくなるためだと考えた。また、高い英語能力を持つ竹園高校の生徒のみを対象としたアンケート調査であったため、外国語を用いて造られた語が多くなり、「借用法」の語が増えたとも考えられる。

6. 今後の課題

アンケートの形式を自由回答にしたため、回答にばらつきが出て分類するのが難しかったり、特徴が掴みづらかったりしたため、提示した回答を選択してもらった形式のアンケートも実施したい。また、今回は造語法だけに注目して調査したが、新語の品詞などその他の特徴にも注目した調査を行いたい。

謝辞

本研究にあたり、アンケート調査にご協力頂いた茨城県立竹園高等学校の生徒の皆様、また探Q活動において多大なるご指導を頂いた直井先生には大変感謝しております。ありがとうございました。

参考文献

〔1〕有元光彦 黒崎貴史 (2017) 「言語行動から見る新語形成プロセスについて——熟議を利用して——」 山口大学教育学部研究論叢第68巻p325-334

〔2〕米川明彦 (1989) 「新語と流行語」 南雲堂 p98-129

〔3〕三省堂辞書を編む人が選ぶ「今年の新語2023」

<https://dictionary.sanseido-publ.co.jp/>